

「千の丘の国」ルワンダ滞在紀行



こんにちは！ARCで本年5月よりインターンシップをさせて頂いている吉田祐樹です。この度、8月4日から11日までルワンダに、インターンシップの現地調査ということで行かせて頂きました。初めての一人旅がアフリカということで、不安も多少ありましたが、現地の方々の温かさに触れる中で、本当にルワンダが好きになりました！ここでは、その7日間の旅の内容を簡単ではありますが、ご紹介させて頂きたいと思います。どうぞ最後までお楽しみ下さい！

～ルワンダの基本情報～

今回の旅での出来事を紹介する前に、「千の丘の国」と謳われている自然豊かな内陸国、ルワンダについて少し紹介させて頂きたいと思います。



正式国名：ルワンダ共和国
首都：キガリ
言語：キニヤルワンダ語、仏語、英語

面積：2.63 万平方キロメートル
人口：1030 万人（2010 年、UNFPA）

通貨：ルワンダフラン

主要産業：農業（コーヒー、茶等）

経済成長率：5.3%（2009 年）

元首：ポール・カガメ大統領

（参照：外務省ホームページ）



Kigali Memorial Center です。ここでは、94 年の虐殺に関連した詳細な情報はもとより、それ以前のルワンダ国内の状況、そして虐殺後から現在に至るまでの被害者の苦しみをはじめ、その展示の内容は多岐に渡ります。特に印象的だったのが、生存者の方々のインタビューがスクリーンで見られたことです。彼らの語るあまりにも恐ろしい体験に、思わず耳をふさぎたくなる思いでした。



虐殺で亡くなった方々の写真 (Kigali Memorial Center)

<虐殺記念館訪問>

まずルワンダの首都キガリに到着した翌日（8月5日）、1994年にルワンダ全土に広まった大虐殺を記念して建設された虐殺記念館（Genocide Memorial Center）を訪問しました。現在ルワンダ国内には幾つかの記念館が存在しますが、今回はそのうちの3つを訪問しました。まず訪れたのは、Gisozi という地域にある



Kigali Memorial Center

また建物の2階では、アルメニアの大虐殺（1915-1918）やホロコースト（1939-1945）など、世界各国で起きた虐殺の展示も行われておりました。今後二度とこのような悲劇をルワンダ国内のみならず、世界中のいずこでも繰り返してはならないという、ルワンダの人々の力強い決意を感じました。その後昼食をはさんで、Ntarama という地区の虐殺記念館を訪問しました。ここは虐殺が起こった当時は教会で、多くのルワンダ人が身を隠しにやってきましたが、その多くは殺されました。現在でも、おびただしい数の被害者の血のついた衣服、頭蓋骨、体の骨などがそのまま残されています。そのあまりの多さに圧倒され、目を背けずにはいられませんでした。更に驚くことに、被害者の死体は近年でも新たに発見されることが多いようで、私が記念館を訪問した前日にも、記念館付近から新たに死体が発見されたそうです。次に訪れたNyamata という地区の記念館にも、数多くの犠牲者の頭蓋骨が保管されており、虐殺が広い地域に広がっていたことを証明していました。虐殺記念館訪問を通して感じたことは、人類はあらゆる差異を超越して、お互いに尊敬できるようにならないといけない



Ntarama Genocide Memorial

と実感しました。また、一国のリーダーは、そういった「寛容の精神」を社会にしっかりと浸透させるように尽力するべきだとも思いました。

<Hotel Des Mille Collines 見学>

7日(日)には、アカデミー賞にもノミネートされた映画「ホテル・ルワンダ」の舞台となったHotel Des Mille Collinesを訪問しました。虐殺が起こった当時、ホテルの副支配人であった、ルセサバギナが、1268人のルワンダ人を自分の意志で極秘にかくまって、命を救ったことで知られています。今では、あの虐殺からは想像もできないような平和で、落ち着ける雰囲気のホテルとなっています。つい8ヶ月前にリニューアルされたばかりで、勇壮なホテルの外観、大きなプール、様々な国の料理を提供する2つのレストラン等、全てが最高級でした。次回ルワンダに来ることになったら、是非滞在してみたいものです。



Hotel Des Mille Collines

<Gisimba Memorial Center 訪問>

8日(月)には、Gisimba Memorial Center (GMC) という孤児院を訪問させて頂きました。ここで暮らしている子供たちの両親は、虐殺の際に亡くなったり、病気で亡くなったりしたそうです。ARCは、この孤児院を2002年からサポートしてきており、奨学金を提供するなどして、子供たちの教育環境の向上をはかってきました。孤児院からは、子供たちの描いた絵を日本に送って下さり、今現在でも交流は続いています。当日は、施設の見学と数人の子供たちにインタビューをさせて頂きました。インタビューに応じてくれた子供たちの年齢層ですが、一番年下は3~4歳、一番年上は22歳と、かなりの幅がありました。インタビューの内容と



Gisimba Memorial Center

しては、1) 名前、2) 年齢、3) 学校、学年、4) 好きな科目、5) 好きなこと、6) 将来の夢です。少し恥ずかしそうに話していましたが、一人ひとりしっかりとした将来の夢をもっており、誠実に質問に答えてくれました。インタビューの他には、交流の一環として、僕が日本から持って来たボールでみなでサッカーをしました。みんな嬉しそうで、結局3時間ほどずっとサッカーをし、孤児院をあとにする頃にはくたくたになっていました。また、お昼ご飯も子供たちと一緒に食べさせてもらうことができました。孤児院に滞在した時間は少しでしたが、本当に子供たちの純粋な笑顔に元気をもらい、体はサッカーのせいで疲れましたが、心は少し若返らせてもらった気がします。両親がいなくても、あんなに元気に振舞っている子供たちを見て、両親が元気である自分はなんと恵まれていて幸せなんだろうと思ひ、それを当たり前と思っていた自分を反省しました。子供たち、当日までお世話して下さいましたGMCのイルデフォンスさんには感謝の思いでいっぱいです。



子供たちとサッカーを楽しむ



Gisimba Memorial Center の子どもと

<ARTCF 訪問>

9日(火)には、ARCがサポートしてきた、ARTCFを訪問しました。ARTCFは、バナナリーフカードの作成や、洋裁、土地開発など、様々なプロジェクトを行ってきています。そこで働いている女性の大半は貧困にあり、夫がおらず、家賃を払うのも厳しいという生活を送っています。彼女たちの活動に関して、ARTCFのジョセフィンさんに少しお話を伺うことができました。洋裁を女性に教えるプロジェクトは、6ヶ月のトレーニング期間があり、それを終わると、クレジットとしてミシンが進呈され、彼女たち自身で服やスカーフを作って売るといった流れで行われています。このプロジェクトは、あまり大きな障害にも直面しておらず、彼女たちの自立を促すのに成功しているとのことでした。彼女がバナナカード作成のプロジェクトに関して強調していたのが、資金不足の問題でした。女性が一斉に作業できる場所がないので、



一心不乱にカードを作る女性

彼女たちは自宅でカードを作っているそうです。また注文がないと仕事ができず、定期的にはできないので、仕事としては大変不安定であるとおっしゃっていました。幸運にも、その時事務所に来ていた男性の妻が自宅でカードを作っているということで、早速お願いして家に案内してもらうことになりました。家に着くと、彼の奥様がバナナカードを作成していました。ポストカードサイズのもの、もう少し大きめのサイズのものがあり、どちらも大変細かく、気の遠くなるような作業のようでしたが、彼女は淡々とこなしていました。僕も何枚か購入し、日本の友人や知人に渡して、ARTCFの宣伝をしていこうと思っています。



完成したバナナカード

<駐ルワンダ日本大使館訪問>

10日(水)には、在ルワンダ日本大使館を訪問させて頂き、日本人職員の荒木伸仁さんにインタビューすることができました。自民党の森喜朗氏が首相だった頃、アフリカ支援に力を入れる姿勢を示しており、アフリカ諸国の比較的治安の良い国には日本大使館を設置してアフリカ支援に貢献していこうとの構想から、2008年に予算が決定し、2010年1月に在ルワンダ日本大使館の開設が実現しました。同年に、モーリタニアとベナンにも日本大使館が設置されたとのことでした。ルワンダにおける日本の重要性はまだ



日本大使館の入ったビル。近くにはアメリカ大使館もあります。

あまり高くなく、日本側もあまりルワンダ支援を進められておらず、ルワンダ側からも支援の要請はあまりない状況だそうです。しかしながら、その中でも日本大使館としては、ルワンダの村に学校の校舎や体育館、また給水設備を建設、整備したり、また停電に備えて病院にソーラーパネルを設置したりなどという支援を1年間に3,4件行っているそうです。またルワンダの展望としては、隣国であるケニア、タンザニア、そしてウガンダからより多くの人ルワンダに来てビジネスを始め、外国企業と競争することで、ルワンダ人のビジネスや経済に対する意識がより高まり、より高度な経済成長が期待できるのではないかと語っておられました。首都キガリには、高層ビルも立ち並び更なる発展が予想されますが、農村に行くとも一日の生活で精一杯な人々がまだまだ大勢います。こういった貧富の差をできる限りなくし、ルワンダがより発展していくことを期待してやみません。荒木さん、お忙しい中、貴重なお話をさせて頂き、大変にありがとうございました。

<アカゲラ国立公園訪問>

ルワンダ滞在の最終日には、アカゲラ国立公園(The Akagera National Park)に行ってきました。ホテルから車で東へ走ることおよそ3時間、そこにはよくテレビで見ると、壮大な自然が広がっていました。公園のゲートをくぐってすぐに、色々な動物が出迎えてくれました。シマウマ、レイヨウ、ウォーターバック、水牛、キリンと、やはり野生の彼らに遭遇すると興奮を抑えることができませんでした。ガイドさんの話によると、来年ぐらいにこの公園は私有化され、現在公園にいない動物(ライオン、トラ、チーターなど)を連れてくることになっているそうです。そのため、公園の周りにフェンスを作る作業が行われているそうです。公園にいた時間はそれほど長くありませんでしたが、短時間で本当に多くの動物に近距離で会うことができました。



レイヨウの群れ



シマウマ



キリンにこんなに近づけました！



バッファロー(水牛)もいました。気性が荒いそうなので遠くから撮りました。

<今回の旅を終えて>

初めての一人旅ということで、始めは少し緊張していましたが、本当に一日一日貴重な体験ができ、最高に楽しむことができました。また、行く前はアフリカは治安が悪く、外国人は狙われやすいんじゃないかと思っていましたが、ルワンダ、キガリでの滞在期間中、危険な目には一度も会わず、むしろ行き交う人と笑顔で挨拶し合えるほどの治安の良さ、人々のフレンドリーさに、自分自身が偏見を抱いていたことを深く恥じました。また虐殺時のことも記念館を訪れるなどして勉強し、ルワンダの方々が、辛い歴史をしっかりと後世に語りついでいこうとする決意を感じました。Gisimbaの孤児院での子供たちとの交流もとても感動的で、両親がいないのにここまで一人で強く、そして笑顔で生きている彼らの姿をみて、心が洗われるような思いがしました。全ての体験、全ての人との出会いが、一生の思い出となりました。この経験を決して無駄にすることなく、これから世界に目を向けて、将来は国際協力の闘志として一生を全うしていこうと思っています。この旅は多くの人の協力、支えによって実現しました。航空券の手配をして頂いた道祖神の土手さん、Gisimba Memorial Centerのイルデフォンスさん、ARTCFのジョセフィンさん、アカゲラ国立公園訪問の際のガイドさん、日本大使館の荒木さん、ドライバーをして下さったムニャカジさん、この旅の最大の助けをして下さった小峯先生、そして快く送り出してくれた両親に深く感謝申し上げます。

ARCインターン生 吉田祐樹



タクシードライバーのムニャカジさんです。本当にお世話になりました！ありがとうございました!!

アフリカ平和再建委員会 Africa Reconciliation Committee: ARC-JAPAN



〒160-0004 東京都新宿区四谷4-6-1四谷サンハイツ511
Tel/Fax: 03-3351-0892 E-mail: headoffice@arc-japan.org

ホームページ <http://www.arc-japan.org>

ツイッター始めました！アフリカの紛争と平和に関するイベントや情報の発信をしています！



@ArcJapanNews

どんどんフォローしてください！